

## アイデンティティはどこへゆく

黄慕薇

### 都市をほぐす＝アイデンティティをほぐす？

「都市をほぐす／Unlearning Cities」は2022年東京芸術祭ファームのテーマ。台北、東京、台南（台湾）、ロンドン、そして再び東京に戻った今、この都市に馴染みを感じながら、どこか漠然とした感覚もあった。どこにも属しない自分自身のアイデンティティは年や経験を重ねて固まるのではなく、むしろ段々流動的になっていく。応募当初の自分の心境は今回のファームのテーマと自然とシンクロした。

よく考えたら、ファームのテーマを見て参加しようと思うよりも以前から、東京芸術祭の取り組みが気になっていた。過去の職場で東京芸術祭を見学しようという話はあったが、実現できなかったことも、今回躊躇なく応募を決めた理由の一つとなった。当初、アートトランスレーターアシスタント、アシスタントライター、制作アシスタントのいずれにも興味があったが、いろいろ考慮した上でクリエイティブインターンを選択した。作品がゼロから作り上げられる過程を一度近くで見たいというごく単純な動機もあったが、多様な背景を持つメンバーが集まる創造の現場とその過程を通してアイデンティティについて考えさせてもらえるという期待が心の底にはあった。

### 教育とアイデンティティ

そして、y/nチームのクリエイティブインターンになった。今回のy/nの作品は「教育」をテーマとしたレクチャーパフォーマンス的な作品だった。レクチャーパフォーマンスは近年、アジアの芸術祭でよく見かける形式だが、最初はそのクリエーションの過程はもちろん、自分がいかに貢献できるのかも全く分からなかった。ファームではオンライン稽古をはじめ、滞在制作、リハーサル、公演の最初から最後まで見学していたことで大満足したなか、特に新鮮に思ったのはオンライン稽古から対面での滞在制作への転換と変化、そして何よりも作品の全体を貫くフォーマットだった。フォーマットというのは、アジアの教育システムで馴染みのあるマル／バツ・クイズを通じて、上演用のテキストが作り上げられていくこと。オンライン稽古の期間、パフォーマーはクイズを出し合っていた。滞在制作ではパフォーマーが実際に身体を用いて舞台上でマル／バツのどちらかの答えに移動することによって作品が展開されていった。クイズは一般常識をはじめ、教育に関する法律や規定がテキストの中に組み込まれている。試験に出てきそうな質問もあり、個人の考え方やアイデンティティや価値観を伺う質問もある。パフォーマー同士が質問に答えることを通じて相手を知っていくことは、自分のアイデンティティを再確認する過程でもあるように思った。パフォー

マーが予想された答えと反対する側に移動するとき、また質問に対する個人の解釈の相違によって答えが違ってくる時、質問の本当の意味を考えさせられた。見学者として、また観客として、自分のアイデンティティが揺らされ、再形成させられたように感じていた。

この作品を通じて質問自体だけではなく、答えの裏付けについても考えることができた。アイデンティティとは一体何なのか？ 自分自身のいる場所なのか？文化なのか？ それとも言語なのか？ これらを超えた何か他のものの可能性があるのか？ 自分の認めるもので良いのか？ 他人にも認めてもらわなければならないのか？ 教育は自分のアイデンティティと価値観の形成にどのような影響があるのか？ 答えのある質問から、答えのないことに変化し、永遠に続きそうな質問と応答は最初にパフォーマーの間で「何を伝えたい？」との疑問も生じたが、滞在制作が進んでいくにつれ、パフォーマーたちが話し合いの中で考え、時に対立し、時に分かち合い、最後にシステムの中で楽しめるようになったと同じく、教育もアイデンティティも、考え方も生き方も、こういうふうに繰り返し問われながら形成していくものだと思った。

### **国際共同制作の現場で得られるもの**

このフォーマットは創作面でも実行面でも様々なシチュエーションに対応していた。まず、台湾、シンガポール、フィリピンから参加したパフォーマーたちが異なる文化背景を持つため、特に言語に頼るオンライン稽古では何か共通の枠組で話を進めていく必要があった。次に、オンライン稽古と滞在制作の短い期間で作品を仕上げることにとも対応できた。さらに、ワーク・イン・プログレスのブラッシュアップにも対応するように、いつでも入れ替えのできるような仕組みであった。フォーマット自体は作品の様態に大きな影響を与えたほか、パフォーマー以外、ほかのチームメンバーもシステムに取り込まれるように見えた。クリエイティブインターンの立場から考えてみると、クリエイションに介入しない見学者のスタンスであるにもかかわらず、教室のようなセッティングから、見ているだけでも何かしら教育の影響を受けるように感じていた。

フォーマットが強ければ強いほど、多様な背景を持つパフォーマーは作品のバリエーションに貢献する。そういう意味ではこの作品は国際共同制作である必然はないが必要はあるように思った。一方、このフォーマットはとても日本的であるとも感じ、グローバルな現場に持っていったらどうなるのか、作品の流れや結果をひっくりかえすような創造は許されるのかをいつか考えるようになった。それは作品の今後の発展を考える意味であり、自分を含むチームメンバーそれぞれの立ち位置を考えることでもある。もっと積極的な役割をフェーズ終了後から考え始めている今、この作品の意義がグローバルな現場でも必然的に共有できるものになるよう望む。

## 終わりなき旅

クリエイティブインターンは自分にとって異なる文化の中で何ができるのかを考えさせられる最初のきっかけとなった。ファーム期間中の出来事として、ある国際交流の企画を台湾の友人と共同で立案することになった。オンラインから対面に転換するクリエイションという共通点はあるが、今回の経験を直接的に生かせたというより、何か直感的な繋がりができたことの方が純粹に嬉しく思う。一方、個人の活動の踏み出しとして、自分は何を持って他人を支えられるのか？何を考え、何を思い行動しているのか？たくさんの場面でアイデンティティが問われるような気もした。これからも創造の現場を支える者として活動していきたいと願いながら、アイデンティティ探しという終わりなき旅の途中、時に悩み、時にその悩みを楽しみ、自分をほぐし、学び続けたいと思う。



### 黄慕薇 (ふあん むーうえい)

—東京（日本）

台湾出身、2022年4月来日。アートコーディネーター、日中・中日翻訳・通訳者。「小劇場学校」修了生、「澗劇場」共同創設者。現在、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科に在籍。主な関心はサイトスペシフィックアートとパフォーマンス、空間と場、オルタナティブスペース。複数の都市での生活経験から複雑なアイデンティティを持ちながら流動的な生き方を模索中。